

広島大 岩重博文

目的 本研究では、室内装備とよばれる家具類のテクスチャーや色彩が、室内視環境要素として室内居住性評価に深く関連していることに注目し、室内雰囲気の評価について考察する。具体的には、住居の寝室を例にとり、ベッドカバー、カーテンなどの色彩と、壁および天井などとの色彩的な組み合わせによる評価の違いを、縮尺模型を用いて検討する。これらより、室内空間の家具等についての色彩計画が、部屋の雰囲気および影響について考察し、今後の室内色彩計画の指針とする。

方法 12畳の寝室の1/10サイズの縮尺模型を用い、家具等の色彩、壁面および天井面の色彩を変更する場合の室内の雰囲気を評価する。室内にはベッドカバー、カーテン（2箇所）、簡単な一對の肘掛け椅子セットを置いた。予備実験により、壁および天井の色彩を3種類から1種類（ベージュ）にしぼった。ベッドカバー、カーテンについては28種類の色彩の布により作成し、7段階のSD法で評価させた。被験者は39名であった。平均SD得点よりプロフィールを作成し、因子分析も行って因子構造を明らかにする。

結果 1) 実験により得られたSD得点をもとに、クラスター分析の考え方にに基づき28種類の布を分類したところ、快適性の視点から4つの色彩グループに分類できた。2) 各グループの特徴より、空間の快適性と家具等の色彩の明度および彩度とは密接な関係にあることを確認した。明度が高くても彩度を低くした場合は快適性評価は高い。しかし、明度および彩度の両方が高い場合は評価が悪い。3) 因子分析により、快適性、活動性、様式に関する3つの因子を抽出することができた。